

新春初登山「ブナ山(点名:川津Ⅱ等1119.5m)」

◇実施日 平成27年01月03日(土) 晴時々曇り、

◇参加者 **沖崎吉信、川島 功、濱野兼吉、湯川一郎、中前 偉、**

畑林清子、生熊千満子、高階美根子、須崎誠久、

中根裕磨、**榑本真仁、山口泰宏、三井幹雄、**

河野芳宏、**瀧本昭太郎、斉藤和美**

16名

皆さんあけましておめでとございます。旧年中はお世話になりました本年もよろしくお願ひします。

以前玉岡さんにお聞きすると、山彦の初登りは長い間近郊の山で初日の出を拝む元旦登山が長く続いた様であるが、奈良・大阪地区等の会員の増加に伴い、雪を求め近郊から徐々に奈良県中部・北部の山へと移行し、実施日も1月初旬に変わって来た様である。数年前まで参加者も一桁台とややさみしかったが、昨年の観音峰は21名、今回は16名の参加があつて、賑やかで楽しいものであつた。

今回のブナ山選定についても川島代表は、盆頃から何処にするか迷っていたが、11月にブナ山・高時山と決め、11月30日〜12月1日の行仙宿・忘年山行で皆さんにはかり、1月3日(土)実行と決定したものである。私も10年も前?風屋く三里道く高時山くブナ山く高津(たこうつ)集落を歩いているが記憶が飛んでいて、12月26日に川島代表と下見に出かけた。

10年振り訪れた高津は、予想以上に寂れていた。何台かの車が駐車されているものの全く人が無く、雨戸が締まっている家が大半である。洗濯物のある家をやつと見つけノックした。

年配の女性が出て来てくれる。この家の直ぐ裏手に三里道の入口で小さな道標があると教えて頂く。ここも人が住んでいるのは、以前は35戸程あつたが今は10軒弱で、老人ばかり等と世間話、2〜3日前に年配の夫婦がこの家の前に駐車し、ブナ山・高時山へ登つたが、暗くなつても下山せず心配した。あなた方も十分気を付ける様にと注文があつた。

さて、当日の天気であるが、元旦からの寒波襲来で元旦・2日と風雪が厳しかったが、今日は青天で風も無く絶好の登山日和であるが、相当の積雪が予想される。

168号線・二津野ダム湖沿へと下ると昨夜降つた雪が国道斜面に残り、橋の上は真っ白に積雪している。

風屋集落手前の日陰の路面からは、積雪があり慎重に走行。高津バス停に着くと三井車以外は既に到着。天辻峠は雪が多く集合場所に到着するか心配したこと。直ぐに三井車も到着し、瀧本車に追われ道を譲つたとのこと。

高津集落への道は、スイッチバックするカーブが3箇所あり、この雪ではバス停から歩行するかの話が出るが、車で上れるか沖崎車が試走。登れることから沖崎、中前、榑本・川島車で高津集落へ、集落へ上った路側に駐車。



高津バス停・打合せ



高津集落道から登山口へ



高津峠で小休止

下見で立寄った登山口の藤本さん宅まで歩き挨拶し、2回目の参加になる中根君の法螺の音と共に「三里越」道標に導かれ西熊野街道を辿る。

集落近くの新雪の道には、猪、鹿・野兎などの足跡が多く見られる。しばらく上ると道祖神がある。

杉松林の斜面をトラバース気味に徐々に高度を上げ、二つ目の支谷を横切る地点で小休止して厚着を直す。

尾根近くでジグザグに登ると鳥峠(高津峠)標識のある峠に出る。ここまで通称三里道と呼ばれ十津川主要街道のひとつで、風屋へと延びている。ここを通り高野山、五條、京大阪へ、それぞれの目的、思いを持って歩いただろう、特に思ったのは明治22年の大水害で故里を離れ、北海道へ移住した人がこの道を歩いた時の心情がどうであつたらう。

十津川に、この時の数え歌が残っている(文末記載)。幸いにも風が殆んど吹かない。小休止の間にブナ山への案内標識を取り付ける。山口さんからカステラの差し入れがある。軽アイゼン持参の人は着用を伝えたが皆さん無着用。



急傾斜尾根を上る 電波反射板塔前にて 山頂前の尾根ラッセル
山頂から東に派生した標高差約400mの尾根へ進む。トッ
プは河野氏にお願いし、汗をかかない様にゆっくり登る。積雪

の急斜面は尾根の木を掴みながら登る。少し緩やかな赤松混ざりの平坦な尾根で小休止、この間に軽アイゼン着用者もある。雪はスノーパウダーで北側からの風が強く立木の風下、尾根の南側等は吹き溜まりとなり積雪30〜40cmある。1時間ほど登ると電波反射板塔のある地点へ。

電波反射板塔を回り込み緩やかな尾根径になり、北北西尾根と合流し、左側杉松林と広葉樹の境界尾根を辿り、広葉樹尾根に変わり、緩やかに下り上ると広いブナ山の山頂に12時に到着する。落葉した梢越しに高時山の南側以外は眺望がある。

足で除雪して二等三角点を捜しお屠蘇を据え、山頂に新宮山彦ぐるーぶの標識を設置する。石が見つからず倒木を切り、カケヤ代わりにして木杭を打ち込む。

「皆さんのご健勝と山彦ぐるーぶ益々の発展を！」今西先生流万歳で山頂にかけ、今年未歳の生熊さんと参加者の良き年を祈念して太平洋で乾杯！



標識と三角点上のお屠蘇 万歳三唱！ お屠蘇で乾杯！
風除けシートを張り、恒例の焚火をするため枯れ木を集め、雪面に太い木を敷詰め火床にして燃やす。初体験の方もいて、感激の様子、何と言っても最高のご馳走である。手先が冷たく痛く感じたが、焚火の暖で解消する。

ルート図 (2.5万地形図「風屋」)



【参考】十津川村に明治22年の大水害で北海道移住の時の
数え歌が残っている。

- 一つ、本年八月に天災ありたるばっかりに、移住話が始った。
- 二つ、ふる里はなれて北海道へ、移る移らん大さわぎ、親族会議も開かれる。
- 三つ、皆さん行くかよ行かんかと、移住話で日を送る、百姓仕事すて

おいて。

- 四つ、夜昼役場につめかけて、移住嘆願差上げる、許可は如何んと待ちうける。
- 五つ、いよいよ移住の許可下り、菱十の御紋は袖じるし、皆さん支度にとりかかる。
- 六つ、無理から荷物を送り出し、家財道具もかたずけて、行く日くるのを待つばかり。
- 七つ、長年暮らしたなつかしの、我が家をふみ出す淋しさは、云うに云われぬ胸の中。
- 八つ、ようようおばこにさしかかり、生れ故郷をあとに見て、向うえ一足あとながむ。
- 九つ、ここは大又その翌日は、弘法大師に参詣し その夜は高野のりうせん寺。
- 十、とうから準備し旗をたて、勇んで下るは不動坂、その夜は紀伊のおはら屋で。

(記 沖崎・川島)